ベルンハルト・シュリンク氏の講演会報告

松 永 美 穂

シュリンク氏の来日が決まったのは2005年夏。早稲田にも来てもらえることになり，文学部キャンパスでの講演会であることを伝えると，「文学的に書くことと学問的に書くことについて」というタイトルが提案されてきた。フンボルト大学教授であり，法学者として学術的な著作も多いシュリンク氏が語るにはふさわしいテーマだといえよう。講演会は2006年4月5日午後3時から文学部大会議室にて，100人以上の聴衆を集めて行われた。(聴衆には学外者も多く，シュリンク氏に対する関心の高さをうかがわせた。)

シュリンク氏は自らの講演を，3つの問いから始めた。「作家はどんなときに書き始めるか」「作家は世界をどうとらえるか」「自分が初めて物語を書いたきっかけは何だったか」。

数学とドイツ語と歴史が好きな少年だった彼は，年長の友人の薦めで法律を専攻し，体系的にものを考えることを学んだという。学問的に書くことは楽しかったし，少年時代から感じ続けていた「書く喜び」を学問する喜びに置き換えられるのでは，と期待したが，10年ほど経ったときに何かが足りないと思うようになり，ミステリーを書き始めた。シュリンク氏にとって「書く」ことは，考えていることを証明することでもあった。学問的に書く場合にも文学的に書く場合にも共通するのは問題設定のプロセスであり，その問題について考え，解決する喜びなのだそうだ。それは他の職業にも共通するものであり，大学でも問題設定と解決の喜びが第一に教えられて然るべきだ，と彼は主張する。ただし，彼の意見によれば，書いたものに対する「これだ！」(Stimmt's!) という感覚は，学問の場合には根拠づけ可能なのに対して，文学の場合には根拠づけができない。また，文学テクストの場合には，テクストが自律性を持ち，思わぬ方向へストーリーが発展していくことがありうる。文学的なものは最後まで書いてみないとできばえがわからないし，書くための規則などはない。文学研究者にはもしかしたらその規則がわかるのかもしれないが，作家である自分にはわからないし，わからなくてもいいと思っている。さらに，文学的な執筆は学問的な執筆より孤独な作業であって，成功も失敗も一人で味わわなければならない。ナボコフが，「作家になるには何が必要なのか」と訊かれて「文章への愛」と答えたそうだが，これは本当のことだ。この愛も根拠づけは難しいが，経験することは可能だ。自分は手で文章を書く場合に最も喜びを感じる，とシュリンク氏は語った。

教授資格申請論文の執筆や，ミステリーの賞の審査員を務めたときの体験などを交えて語りながら，文学作品・学術論文それぞれの「書く」プロセスを比較しつつ講演が行われ，さらに聴衆から，『朗読者』執筆のプロセスについて，影響を受けた文学についてなど，活発な質問が出された。作家デビューが比較的遅く，90年代に判事・大学教授・作家の兼業を続けていたシュリンク氏は，最近では法学者としての活動を減らしつつある。彼が自らの執筆活動を分析して語るのは珍しく，貴重な機会であったし，そのあとの「かわうち」での恒例の懇親会も，和やかで楽しいひとときであった。